

宗教文学としての「般若心経」

Poetry in "The Core Sutra of Perfect Wisdom"

村松 眞一

MURAMATSU Shin-ichi

Abstract. In this approach to the notable sutra, the writer tries to show some remarkable points of interest. First, its somewhat dramatic way of presentation: Prologue, Bodhisattva's Introduction, Preachings, Conclusion, and "his truest verse" Chanting. Secondly, his power of revelation— "Form is emptiness, and emptiness itself is form". Third, his all-negative speeches are a particular, dialectic method of preaching, based on the negative-affirmative character of "emptiness". His mind, like Keats' negative capability, would play freely and selflessly. "Emptiness" is really a pivotal word, with poetical ambiguity.

Key Words: "emptiness", power of revelation, dialectic speeches

「空」、道破、弁証法

1. 翻訳で読む「般若心経」

仏典のなかでも、最も短くまた有名な「般若心経」は、原典（サンスクリット）をもとに様々な訳が試みられている。古来、標準的な訳と見做されてきた玄奘三蔵による漢訳、わが国で原典の字句に最も忠実といわれる中村元の口語和訳¹、仏教学者で僧侶でもあった友松円諦の創意ある文語和訳²、さらに近年は、優れた『万葉集』の英訳でも知られるリービ英雄氏（Levy Hideo）による英語韻文訳³などをあげることができよう。

キリスト教の原典『聖書』が、各国語に翻訳され、原典理解のためのアクセスが容易になっているように、「般若心経」もまた、翻訳すなわち融合文化的手段によって、原典の精神に迫り、それを生かすことも、それなりに有意義であろう。

小論は、上にあげた4種類の翻訳によって、及ばずながら、何とかして易しく、かつ味わい深く「般若心経」を理解しようとする試みである。

2. 「般若心経」の構成

262文字から成る簡潔な漢訳では明らかなでないが、段落を設けた口語和訳で読んでみる

と、文章全体は、前口上（プロローグ）、菩薩の説法一序説、本論、結語、一そしてマントラと呼ばれる咒（真言）から成っていることが判明する。漢訳で全文の構成を示せば、

プロローグ 觀自在菩薩。行深般若波羅蜜多時。照見五蘊皆空。度一切苦厄。

序説 舍利子。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色。受想行識。亦復如是。

本論

第1段 舍利子。是諸法空相。不生不滅。不垢不淨。不增不減。

第2段 是故空中。無色。無受想行識。無眼耳鼻舌身意。無色聲香味觸法。無眼界。乃至無意識界。

第3段 無無明。亦無無明盡。乃至無老死。亦無老死盡。無苦集滅道。無智。亦無得。以無所得故。

第4段 菩提薩埵。依般若波羅蜜多故。心無罣礙。無罣礙故。無有恐怖。遠離一切顛倒夢想。究竟涅槃。三世諸佛。依般若波羅蜜多故。得阿耨多羅三藐三菩提。

結語 故知。般若波羅蜜多。是大神咒。是大明咒。是無上咒。是無等等咒。能除一切苦。真實不虛故。說般若波羅蜜多咒。即說咒曰。

真言 揭帝 揭帝 般羅揭帝 般羅僧揭帝 菩提僧莎訶 般若波羅蜜多心經

となるであろう。全体が形式的によく整っていることは一目瞭然である。なお、第3段から4段への移行は判然としないので、第3段と4段を合わせ第3段としてもよいであろう。

3. 「空」と「諸行無常」

内容を大づかみに解すれば、この短い経文は「空」を説いたもので、その教えはもっぱら「空」に終始し、「空」を徹底して行ずることによって彼岸への達成ができる、と説いている。その徹底ぶりは、初めて読む読者は辟易するほど、すごいものである。

にもかかわらず、「空」は一読して分かりやすい思想ではない。翻って考えれば、いわゆる「諸行無常」と結局同じことだと言えなくもない。そして、おそらく「諸行無常」のほうが分かりやすい、という人が多いであろう。「諸行無常」のほうが、われわれ日本人の感性に訴えやすい。そして「諸行無常」をしみじみと感じさせてくれる古典的名文といえ、誰でもすぐ念頭に浮かぶのが、『平家物語』や『方丈記』の冒頭の文章である。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅雙樹の花の色、盛者必衰のことはりををあらはす。おごれる人も久しからず、ただ、春の夜の夢のごとし…」

「ゆく川の流は絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある、人と栖と、またかくのごとし。」

前者は仏教的無常観を、豊かな仏教説話の連想を伴う無常哀感、無常美感として表現し、この叙事文学の冒頭を飾ってきた。これは暗唱するに足る名文であり、この無常観に裏うちされて、いわゆる「平曲」として琵琶の伴奏により語られてゆくならば、その感動はひ

としお胸に迫るものをもっていよう。

後者は、これまた、中世隠者文学の最高峰の一とされるその随筆文学の書き出しとして、その対句仕立ての格調高い表現によって読者を魅了してきた。ここには、煩わしい俗界から身を引き、澄んだ冷静なまなざしで、世の姿を見つめている作者が窺われよう。

しかし、もしT. S. エリオットが述べたように（「宗教と文学」）、文学批評を完成するため、宗教的見地からも批評することが許されるならば、そしてこれらの章句が彼岸への明察を可能にしてくれるかどうかを問うならば、それは必ずしも我々を十分に満足させてくれるものとは言えないかもしれない。

元来、『平家物語』や『方丈記』は救済の書ではない。救いを説いたものではない。だからこうした観点から「般若心経」を読んでみると、文学としては、上にあげた章句のような表現の味わいは乏しいであろうが、彼岸を見通すその明察の力においては、はるかに徹底したものと云わざるをえない。

その要因は、ニュアンスの違いにあると思う。「諸行無常」のほうは、このあとに続く涅槃経の「是生滅法 生滅滅已 寂滅為楽」を補い、祇園精舎物語の連想を考えても、無常哀感として消極的無常観に傾きやすいが、「般若心経」のほうは、「空」という特有な言葉の使用と抽象的な説き方に、その特徴があり、極めて積極的な無常観だからである。

4. 「般若心経」の魅力

われわれ日本人は、とかく抽象的、観念的な表現を詩的とは認め難い傾向がある。しかし英文学の意識から言うならば、例えばT. S. エリオットの名詩「^{フォア クォー テッツ}四つの四重奏曲」の書き出しは、抽象的な表現ではあるが、詩的である。

Time present and time past

Are both perhaps present in time future,

And time future contained in time past. (Burnt Norton, 1-3)

現在の時と過去の時は、

ともにおそらく未来の時のなかに在り、

未来の時は過去の時のなかに含まれよう。

同じ意味において、「般若心経」の文章も抽象的な表現が多く用いられているが、一種の詩的魅力があると言わざるをえない。

それは第一に、弟子に向かい教えを説く宗教文学の形式をそなえた格調であり、第二に、上に示したような構成をもつ、首尾一貫した説き方の中にある話法の妙味である。

これを読み味わうには、漢訳の棒読みより、和訳や英訳の朗読がよく、例えば友松円諦で、まずプロローグと序説部分の引用を許しただくと、――

^{ひじり}聖なる観自在菩薩、いと深き^{ちえ}般若の^さ槃羅蜜多^{おさ}を行めたまいしとき、物と心の集まりは、
^{よろず}一切みな^{さながら}自性に^{うつ}空ろなりと^{さとりえ}照見たまえり。

舍利弗よ、この世においては、色あるものみな空ろにして、空ろぞ色をかたどれり。
 色あるものをおきて空ろということなく、空ろの他に色のかたちはあるべからず。受も
 想も行いも識もまたかくのごとし。

この序説以下（「舍利弗よ…」）には、教えの力と、運び方に妙味がある。力とは、いきなり弟子に向かって、この世の現象を一挙に見破る力であり、運び方の妙味とは、直観による思いがけない「弁証法的話法」（dialectic）のことである。

「色あるものみな空ろにして」と、形をそなえているものに実体がないことを道破し、さらに「空ろぞ色をかたどれり」と、実はその「空ろ」にこそ、「色」を色たらしめる根拠があると言っている。かくして、色がそのまま空を表し、空がそのまま色になっている。色が空によって生かされ、空が色を色たらしめている、ということになる。

よく読むと、ここは念を入れていて、二段になっている（原典では三段になっているとのことだが）。友松訳では、初めに「色即是空 空即是色」を訳し、そのあとに「色不異空 空不異色」を訳している。こうしても結局同じことであろう。大事なことは、「色即是空」とまず現象をすっば抜いて「空」だと言い、否、そうだからこそ、それは「色」だと言って（「空即是色」）肯定していることである。弁証法的と言おうか、妙味ある話法ではないか。そして後段では、色と空は互いに同じことの言い換えになっていることを示唆して、ここに大乘仏教の原理ともいべき一句を完成しているのである。

このあとに続く本論は、初め総合的に、この世に存在するものの本質、見かけでなく、その真の様態「空」を指摘し、そのあと、「…もなく、…もなく、…もなし」という言い方で、人間の感覚や意識の営みを次々と否定していくかに見える。

そしてその第3段目に至って、

「無明もなければ、無明の尽くこともなく、乃至、老いも死もなく、老いと死の尽くところもなし。苦も集も滅も道もなく、智も所得もあることなし。およそ所得ということなきをもつての故に」

と説き、一々「なし」と言いながら、徹底してすっばかし、それらに一々囚われない心のあり方を述べていく。否、述べながら、その心になりきっていく。

人生苦を根本から除こうとするこの語調は、ただ、すごいというほかはない。否定と二重否定、または否定と二重否定、と重ねて、やがて全否定とつづけ、執着を絶つ。四つの真理（苦集滅道）と言われるものさえ否定してしまうかのようで、最後に「知識も、知識により得るものも、得るものがないから、何もありません」と言い放っている。ついに、一切ものごとくに囚われない自己、「大いなる自己」となり、それによって真にありうべき本来の自己の、自由な精神のありかた⁴を教えている。ニヒリズムにも、自己喪失にもならない見事な弁証法で、「空」を説く「般若心経」独特の話法である。

友松訳の結語部分は、「是の故に当に知るべし。般若の波羅蜜多は、まこと妙なる真言なり…そは一切の苦を能くとり除くものにして、虚りなきの故に真実なり」とあり、最後

に掲げるその真言を、極めて平明に、そして素直に訳しおえている。

「行^{あゆ}みては、行^{あゆ}みては、彼岸^{かのきし}にぞいたる。菩^{ひとの上のめざめ}提^{かのきし}、ついに彼岸に到ることをえたり。」
この真言を「ガテーガテー…」と神秘的な呪文として唱えるのもよいが、このように訳してみるのも、私には有難い。リービ英雄氏の英訳ではこうなっている。

"Gone gone across, you who have gone across, to the other shore,

You who have reached the other shore. Blessed be wisdom!"

なお、中村注では、「俗語的な用法であって種々に訳しうるが、決定的な訳出は困難」とし、「ガテー」を呼格でなく於格(場所・時点を表す形)と考えて、「彼岸に往けるときに、彼岸に完全に往けるときに、悟りあり、幸あれ」の意とする可能性を示唆している。

5. 解脱への道

あらためて私は思う。「般若心経」理解の鍵は、煎じつめれば「空」の理解にかかっていよう。松原泰道氏が言われるように、「無」の字が次々と使われていても、それは有・無の「無」ではない。和訳、英訳いずれによっても、「実体がない」ということに尽きる。「空」とは、この世の「互いに関係し合い変化している」現象の性質・様態を表す言葉と解したらよいのでないか。英訳では emptyではなく emptinessとしていることに注目すべきである。先駆的なマクス・ミュラー訳でも同様で、"all things have the character of emptiness" (「是諸法空相」の訳)とある。「空」は「般若心経」や大乘仏教に特有な言い方、文体である。静止した存在の「無」ではなく、動きを蔵した性質・様態を表す言葉であろう。だから「無」を連発しても、否定と見えるその言葉の真意は、対象をすっばかすようにして、それに囚われないことであろう。なぜなら、それは「空」であるからだ。「空」とは実に妙味ある詩的な表現ではないか。哲学者はこれを「絶対無」としているが、専門家はともかく、一般読者には、却って分かりにくい。

ちなみに言及しておきたいのは、『ハムレット』の有名な第3独白の冒頭の科白である(3幕1場)。彼は「生きてこの世に在るか、否か、それが問題だ」と言う。彼はこの段階では、在るか否か、存在にこだわったのだ。しかし第5幕、王の前でいよいよレアーティーズとフェンシングの試合を行なう直前になると、一羽の雀が落ちるにも神の摂理がある、との諦念に達し、この試合に臨む。上田邦義氏の能『ハムレット』では、その科白にかけて「この世に在るか否か、もはやそれは問題ではない」としている。私はいかにも能らしい巧みな演出であると思った。

もう一つ考えたことがある。それは、死と生、天と地がセットになっているように、彼岸と此岸はセットになっているのではないかと。彼岸があるから此岸があり、彼岸の自覚によって此岸が真に生かされる関係にあるのではないかと。言わば「彼岸」とは「此岸」を弁証法的に止揚したものではないか。そう思われるからこそ、此岸が真に尊いものと感じられる。「般若心経」は「彼岸」を指し示してくれると同時に、此岸の有難さを教えても

いる。今の世の、この荒れすさんだ現象が情けない。社会が内部から崩壊しつつあるように感じる。年間自殺者3万人を越すと言われる現代の日本社会では、「此岸」の有難さなど消しとんでしまっているやに思われる。何時の世も汚れていたから、古来「欣求浄土」^{おんりゅうじょうど}「厭離穢土」^{えんりていど}という言葉が使われたのかもしれないが、社会の現状はひどすぎる。「空」の自覚により此岸の尊さを復権させる道はないものか。寺院はあまりにも無力ではないか。

「般若心経」を難しい仏教哲学だと思わずに、もっと平易に「空」を理解し、此岸が真に生かされる自覚をもちたいものである。「般若心経」の教えは、ただ「彼岸」を指し示すだけでなく、「此岸」を緩和するために、活用されるべきだと思う。「空」には、あるユーモア感覚へ誘う力を秘めていると解する余地があるかもしれない。

災害に遭ったり、愛する人を失った悲しみは、この教えを以てしても、容易に癒されるものではない。結局われわれは「苦」に耐えて人生を強く生きねばならない。「此岸」を見抜くこと、そして「苦」と「苦」の原因を見据え、やがてそれをすっばかすようにして克服し、それにいつまでも囚われないこと、そうした一步一步が、「苦」を受けながらも今日を、そして明日をよりよく生きるよすがとなるのではないか。人々はあまりにも人生の勝敗にこだわっているように見える。もともとレクリエーションであるスポーツも、勝ち負けにこだわりすぎている。勝敗にとらわれず、負けても笑っていられるなら、苦は軽減されよう。それが「空」を行ずる道に通じると思われる。マシュー・アーノルドの無私な批評精神のありかた“disinterestedness”⁵にも、それは何か通じるものがある。

シェイクスピアは37本のドラマを書き、喜劇、悲劇とさまざまな人間模様を描いてみせたが、そのベースとして、人生を「世界劇場」の舞台と観じていて、晩年に向かうにつれ、その見方を一層強めていった。

「全世界が一つの舞台。男も女もみな役者にすぎない。一人ひとりに出番があり、終れば下りてくる…」(『お気に召すまま』2幕7場)

この舞台は空っぽであった。

注1 中村元・紀野一義訳注『般若心経・金剛般若経』(岩波文庫、1960)。筆者はこの本に負うところが大きい。なお中村元監修『般若心経の世界』(学習研究社、2004)も参照した。これにはマクス・ミュラー訳が載っている。

2 友松円諦編著『佛教勤行式』(東京、神田寺、1998)

3 *THE CORE SUTRA OF PERFECT WISDOM* (東京、清林寺、1998) 漢訳と対訳。

4 禅の修行では「無我」と言っていて、戦時中軍国主義が悪用し、禅僧も「大悟徹底」として特攻精神まで鼓舞したことがあった。このとんでもない曲解は大きな落とし穴である。(ブライアン・ヴィクトリア『禅と戦争』、第10章、光人社、2001)

5 Matthew Arnold, “The Function of Criticism at the Present Time”(1864)